

324-2017

靈魂不滅論

古屋鐵石序
松本天籟著

精神研究會贈本

東京精神研究會

明治
43.11.17
寄贈

序文

序

文

近頃靈魂問題に就き注意を拂ふ者頗る多く靈魂の滅不滅に就き一定の見解を有せざる者は紳士としての資格が缺け居るとまで思ふものあり、由て此問題の一斑を窺はんとする者多きも、深遠なる哲學上の問題なるを以て素人に解し易く記せし書なし、之に由て靈魂問題を深く究めたる松本君に請ふて、簡単に素人にも解し得らるゝ様、靈魂不滅論を書いて貰ひ、曩に余の主宰せる「精神治療新報」に連載せり、然るに大方の學者より簡にして意を盡し居り、素人と雖も一讀すれば其大意を知るを得、との好

評を賜り其雜誌を乞ふ者陸續として忽ち賣り盡し、空しく品切
の回答をせしもの算へ切れず、よりて人の勧めに任せ更に單行
書として發行することゝしぬ。

明治四十三年夏酷暑の候

古 屋 鐵 石 識

靈 魂 不 滅 論

目 次

上 編

第一章 靈魂不滅の起る以所……………一

第二章 個人の意識靈魂となりて不滅なりとの説……………六

第三章 祖先の靈魂は子孫に傳はりて不滅なりとの説……………九

第四章 個人の精神は社會の精神となりて不滅なりとの説……………一二

第五章 宇宙とは何ぞ……………一四

下 編

第六章 吾人の意識と宇宙精神との關係……………一七

第七章 宇宙精神を認めずとの説……………一八

第八章 宇宙の本質は物體にして心意現象は運動の結果なりとの説……………一九

第九章 宇宙は單に機械にして靈魂なしとの説……………二二

第十章 唯我論……………二六

第十一章 絶對的唯心論……………二七

第十二章 結論……………二八

靈魂不滅論 目次 終

靈 魂 不 滅 論

上 編

第一章

靈魂不滅論の起る以所

松 本 天 籟 著

所以る起の論滅不魂靈

靈魂は吾人の死と共に消滅し去るべきものなりや否や。此の問題に關しては古來學者間又は宗教家間に於て極めて暫々論議せられたることなるが吾人は抑も何等の理由によりて斯の如き問題に爾かく焦心するや。此れ聊か注意を値ひするところなり。今少しく其が解釋を試みんに蓋し人(動物も然り)の百意欲中最も愛の念深きは生に若くはなし。生を欲するは實に人類に於ける最普遍最確實の要求にして此は別に論ずる迄も無き人生最大の事實なり。

理想も道德も學術も宗教も凡て吾人が生の要求を其の根基として立たざるは

なく、此れに背きては人生一切のこと悉くその意義と價值とを失ふに至る。人生の第一義は直ちに生其事にあり。斯の如く生は吾人の最大最深の要求なると同時に、死は其の最も忌避し、嫌惡する所なり。そは人生の存在てふ事實能く此れを證明す。人にして若し此の性質を有せざらんか、吾人は人生てふ大事實を今眼前に見ること能はざるなり。尤も時としては人は故意に死を求め或は喜びて死を迎ふるためしもあることながら、斯かる場合に於てもそは決して只徒らに生を厭ひ死を求むるには非ずして何等かの事状の下に生の不可能を感ずるか、又は死によりて更に現在の生以上の不朽なる生を期圖するか等の理由に基くものなり。現在の生に對しては、如何程悲觀的厭世的の觀を爲す人と雖も、猶何等かの形に於て生を求望するは事實なり。斯の如く、それ生は吾人の望むところにして死は其の忌むところなるが故に、吾人は僅かに五十年の短生涯を以て生の完結を見ることに満足する能はず。猶何等か他の形に於て、生、きんことを求む。茲に於て乎、吾人は來世の存在を希ひ、靈魂の不滅を望むに至る。即ち吾人は死に依りて肉體的現世的の生活は此れを了ると雖も、猶來世に於ての生活或は純粹なる靈魂と

しての生活の存續を希求し信仰せざれば止まざらんとす。此れ實に人生深根の要求にして此れが解答を求めて茲に靈魂不滅の問題は起る。故に此の問題を醒し來たれる唯一の動機は人類が飽く無き生の要求にありと言ふを得べし。此れに關し更に他の一因を擧ぐるを得べし。蓋しそは吾人が理想の實現を求むる要求即此れなり。吾人が理想の實現に對する要求は生に對するそれと全く離れたるものには非ず。何となれば理想の實現は必然的に生の存續を要求し、生の存續は必然的に理想の實現を要求するものなればなり。即ち理想の實現の努力を離れて生は成立たず、生を離れて理想の實現は不可能なればなり。人類に於ける生とは何ぞと問は、理想追求の活動なりといふを得べく理想追求の活動とは何ぞと言は、人類の生活其物なりと答ふるを得べし。故に生に對する要求は直ちに理想實現に對する要求に連なるものにして根底に於ては二者全く一致すといふを得れど實際に於ては吾人は二者を以て又自ら異なるものとして感じ居るを常とす。即ち事實としては理想の成就に熱中して生を顧みざるものあり。又生に執着して理想の實現を意圖せざるものあり。故に予は今暫く理想實現の要

求を以て生の要求と區別して考へ而して此れを以て靈魂不滅論の出で來たる他の原因と爲さんとす。前にも言へる如く吾人の生活は此れを一面より言へば理想實現の活動なりと言ふを得べく苟も人たる上は如何に未開野蠻の者と雖も何等かの理想に於て生きざるは無し。勿論その理想とするところには機根相應にさまざまの相異あり種類あるべしと雖も、要するに孰れも現在の自己よりもより完全なる自己として感ぜらるゝところならざるはなし。更に此れを通俗に解すれば現在よりも一層善しと思はるゝところならざるはなし。凡て人は現在よりも一層よしと感ずるところに向ひて活動をなしつゝあるものなり。而して斯く吾人に取りて善きものゝ最上至極は何ぞと言はゞ眞善美即ち此れなり。眞善美此れ即ち人類最高の理想にして人は悉く此の理想の方向に向つて其の生を營む。されど如何なる達者哲人と雖も其の渺たる個人的生涯に於て能く此の大理想を完全に實現するを得べしや。事實を直ちに答へて曰く否なりと。見よ釋加孔子、基督等の如き至人神人を以てするも猶全く完全無缺とは稱し得べからざること。況んや我等凡人をや。茲に於て乎理想的生物たる吾人々類は永久の生を享

けて理想の完成を圖らんとするに至る。此又靈魂の不滅を要求する所以なり。理想の實現に生き理想の實現を以て人生最高の意義と觀し居る吾等人類が理想實現の爲に一生を尊く勇ましく戰闘の間に終りたる志士仁人等が猶現生に於ては遂に其の望みを達することを得ず空しく世の凡俗者流が迫害と中傷と罵詈謗諍との間に子子然として墓に沈み行く有様を見ては、つゞゞ現世の不完全不平極まることを觀じ此の缺點を補はんが爲に完全公正なる來世の存在を希求する結果死後の生活を要求する、此れ又吾人が靈魂の不滅を欲望する所以なり。有名なる獨のカントが靈魂の不滅を唱ひたるが如きは實に道德的理想の完成に對する要求より來たれるものに外ならず。此他猶靈魂不滅論の生じ來たる原因には種々のとを數へ得べしと雖も、此れを要するに右の二者を出づることなき也。余は以上極めて簡単に靈魂不滅論の由つて來たるところを述べたるが次に余はいよいよ本論に入りて靈魂不滅論は果して眞理なりや否や又眞理なりとせば如何なる意味に於て眞理なりや等の問題に就きて論究するところあらんと欲す。

第二章 個人の意識靈魂となりて
不滅なりとの説

靈魂不滅論の中最も通俗にして最も普通に行はるゝものに從へば靈魂を以て人々各自が内に自ら經驗するところの個人意識其物を以て直ちに靈魂と解し、而して斯の如き個人意識は吾人の死後に於ても猶肉體を離れて一の靈として、生前と同様の性質を以て獨立に生活を繼續するものとなすなり。而して此の俗見に於ける所謂不滅とは只死と共に滅せずといふ程の意味なるか又は永遠に不滅なりとの意味なるかは明かに意識せられ居らざるが如し。寧ろ前者の意味に取る方當れるが如し、そは兎に角として果して此の説の如く吾人の靈魂は死後に於ても猶肉體を飛び出で、無形の一靈體として獨立の生活を繼續し得べきものなりや否や。少しく學智ある者誰か甘じて此の不稽の説に同ずべき。余は其の誤謬を證すべき理由の餘り多きに苦しむ。今は精論の暇なきを以て其中最も有力なるもの、一二を語るに止むべし。

今日心理學が其の實驗的研究に本づきて吾人に教ふる所に依れば、心意と物質即ち肉體との間には密接不離の關係を有し、如何なる種類の心意活動と雖も必ずや此れに應じて肉體的活動を伴ひ、又如何なる種類の肉體的活動と雖も必ずや此れに應じて心意活動の上に何等かの影響を與へざるは無しといふ。今暫く心意活動を中心として言はん、茲に一心意活動あれば必ずや其れに伴ひて少くとも或程度の神経の活きと、或程度の血液の供給とを要す。此れ無ければ心意の活動は決して存し能はざるなり。殊に感情又は意志の活きには此れに加ふるに筋肉の收縮又は緊張等其他種々の肉體的活動の伴ふを見るなり。而してこは只心意活動の結果として伴ふにはあらずして斯の如き心意活動の必須的條件として存するものなること今日心理學の均しく證明するところなり。即ち此れを一の原理に攝すれば精神活動の存在する爲には其の必須的條件として物質的活動の存在を要求すて一命題となる。果して然らば肉體と全く縁を絶ちて靈魂のみ一個獨立の活動をなすといふが如きことの妄誕にして取るに足らざるは極めて明かなりといふべし。或は言はんか實に心意(靈魂)の活動には其が必然的の條件

として肉體的活動の存在を要求すべしと雖も活動を離れたる靈魂其物、心意其物即ち其等の本體は別に肉體的の活動を借らずしても獨立に自體を保持し得べきに非ずやと。非なり。余は今靈魂の本體といふが如きもの、意識活動以外に別に存し得べきものなりや否やに就いては暫く言はず。只其の活動を離れて別に靈魂の本體なるものありとするもその如きものは全く所謂個人的精神其物とは質を異にしたる不可知的のものにして、該論に於て不滅を要求する靈魂とは迥然として異なるものなることを告げんのみ。何となれば吾人が現に經驗し居る心意なるものは全く一の活動體又は意識説としてのみ存するものにして此の活動を離れては全く無意識の状態にあらざるを得ざればなり。

又心意活動は外界よりの刺戟を根絶する時は殆ど存在すること能はず。而して外界よりの刺戟を享受せんが爲には人に於ては五官の装置を要す。吾人の心意は實に此の五官より來たる感覺を基礎として其の活動を爲すものなり。吾人の現に有るが如き意識は五官に依りて感ぜられたるところを土台として成れるものなり。若し五官に加ふるに他の感官を以てし、或は全々其れとは類を異にする

る感官を以てせんか、人類の精神は全く吾人が現に經驗し居るものとは質を異にし來たるべし。斯の如く吾人が現在の精神と現在の五官との間には互に密接不離の關係を有するものなるが故に此の五官を失ひたる純粹靈魂の如きものはよし存在し得とするも吾人が現在有するが如き意識とは全く其の活きを殊にすべく、殆んど不可解のものたるべし。此故に生前と同質の靈魂が夫れ自身獨立の生活を營み得べしとは到底考ふること能はざるなり。

此等の理由に依りて彼の通俗的靈魂不滅論の全く一の迷空想に過ぎざることを知るを得べし。

第三章 祖先の靈魂は子孫に傳はりて不滅なりとの説

次に吾人の靈魂は其が子孫の靈魂として傳はるが故に不滅なりとなすものあり。此の見解一理無きに非ずと雖も、吾人は果して斯の如き意味の靈魂不滅に能く満足することを得べしや。實に子孫の靈魂は或る意味に於ては祖先の靈魂よ

り發現し來たれるものなるべし。されど意識状態其物の上より言へば祖先のそれと子孫のそれとの間には甚だしき相異なるべく、祖先の意志感情思想等の面影は殆ど子孫の意識中に尋ねること能はざる場合甚だ多し。進化論の教ふるが如く果して人類最始の祖先がアミーバにありとせば吾人の現に有する精神はアミーバのそれより發現し來たれるものと言ひ得べきが彼れと此れと精神の態様を異にする事當に天地の差のみに非らざるべく、唯非物質的のものといふ以外には全く何等の共通點をも見出すこと能はざるなり。即ち今日吾人は其祖先たるアミーバの精神の特相を人類精神の何處にも發見すること能はざるなり。果して然らば祖先の靈魂は子孫に傳はりて不滅なりといふも、其の傳はるところは決して祖先の靈魂其儘のものに非ず。否寧ろ其相より言へばそれ等は全く別種のものとも見るべく斯くては吾人が個人意識の存續を希ふ要求に對し全く何等の満足をも與ふること能はざるなり。縦し又其相は異なるも精神といふ點に於ては差なきが故に暫く達觀的の見識を以て此れに満足するとするも人類は決して永久不滅のものに非らざるべければ未だ以て眞の滿魂不滅の意義には適はざるなり。

第四章 個人の精神は社會の精神となりて不滅なりとの説

又茲に吾人の精神は社會の中に編み込まれて其一部として不滅なるを得るとなす一説あり。即ち此の説に従へば個人と社會とは元來別個のものに非ずして相互に有機的關係を有し、個人は社會てふ一有機體の各細胞にして社會を離れて獨立に存するものにはあらず、又社會は其の細胞たる個人を離れては存するものに非らざるが故に個人の精神は直ちに社會の精神に連り、社會の精神は又個人の精神に立脚す。従つて個人の精神は社會の上に影響し實現せられて社會精神の中に生々發展し斯くて長く滅することなしといふにあるなり。此の説は前説に比すれば一層吾人に満足を與ふるところ深きが如し。實に個人と社會との關係は生命的のものにして有機體と其の細胞との關係に於けるが如く相互に相待ち相搏つもの社會的ならざる個人は精神は無く、個人より來たらざる社會精神は

無し。個人の精神内容が社會精神に依つて培養せらるゝと同時に社會の精神はまた個人精神に依つて編み出ださるゝなり。されば個人は凡べてその精神内容を社會精神の中より攝取し、而して此に特殊なる個人的賦彩を加へて再び此れを社會精神に向つて投出す。而して一度社會精神に向つて投出せられたる個人の精神はやがて其の中に編み込まれ其の文彩となりて長く其の光を放つ。斯くの如くにして吾人の精神は其の死後に於ても猶ほ不滅の生を得て活動發展す。此れ古來偉人達者が志を百世の後に期して泰然として世を去りし例の多かる所以なり。

されど此説未だ充分に吾人の要求を充し居らざるには非らざるか。茲に不滅なる個人の精神は僅かにそが社會の上に實現せられ承認せられたる部分に止まり、大方は時間の逝波と共に削磨せられ破碎せられ遂には全く世より忘られて其の片影をだも止めざるに至るを常とすればなり。其の當代に於ては聲名赫々たりし者にててもやがては此の運命に接するを免れず。況して世間踏常の凡人に於てをや。若し又一步を進めて其名の後世に忘らるゝを厭はず、其が個人的特色の

薄れ行くを厭はず、只社會精神の滔々たる流れに於て僅かに一滴の水の位置と分量とをだに保ち得て満足すべしとなすも猶社會其物の永遠不滅ならざるが如く社會精神も亦永遠不滅には非らず。従つて社會精神中の一滴として靈魂の不滅を期する又未だ充分に吾人の要求を満足するものといふ能はざる也。

右述ぶるところに依れば孰れの意味に於ける靈魂不滅論も未だ至れるものと言ふ能はず。即ち第一の論の如く死後に於ても吾人の靈魂は能く個人意識としての相と働きとを保ちて獨立の生活を營み得となすものは、能く吾人の要求を充たすもの、如しと雖も、猶それは全く根據なき一片の空想に止まり、第二又は第三の論の如く、或は吾人の精神は子孫に遺傳すと言ひ、或は社會精神の中に抱攝せらるゝとなす者は、勿論合理的のものなりとは言へ未だ充分に吾人の要求を容れ得て此れに多大の安心を與ふるには猶缺けたり。然らば吾人は最早合理的にして然かも一層吾人の要求を満たし、一層吾人に安心を與ふるところの靈魂不滅論を有すること能はざるか。若し然かりとせば吾人は暫く第二或は第三の説に於て満足するの外なきなり。されど百尺竿頭更に一步を進めんか。吾人はそこに猶一

段有力なる一解の存するを見る。請ふ余をして少しく語るところあらしめよ。

第五章 宇宙とは何ぞ

余は今論を行るに當つて壁頭第一先づ前提して言はん。曰く宇宙は有機的全體(オルガニクホール)を成すものなりと。此れ今日所有る哲學科學の均しく承認するところにして、又承認せざるを得ざるところなり。宇宙は此れを一方より見れば千態萬狀多岐多端にして、苟も二個として數へらるゝものにて全く相同じきものはなく、徹頭徹尾差別を以て貫くの觀ありと雖も、然かも此れを他方より觀ずれば其間又自ら一致統一の存するを見る。而して種々の相互なる事物が此の一致統一の點より取扱はるゝ時は一種或は一類或は科等一團のものとして現はれ來たる。而して各種各類各科の間又統一あり。其統一の上に更に又統一あり。斯くの如くにして萬有は彼の論理學上に於ける概念系列を追ひ附々相連つて遂に究極の統一に達す。即ち萬有は此れを一面より見れば至る所に統一あり。若し宇宙は只々差別のみを以て始終し、其の間何等の統一もなしとせば、實に哲學科

學の成立し得ざるのみならず、宇宙其物も又成立する能はず。何となれば凡て物を關係てふ事に於て成立し、而して關係とは多が一によりて統括せられ居る點に存するものなればなり。かくの如く宇宙は差別を總ふるに統一を以てし一全體としての存在を保つ。則ち宇宙は一個の有機的組織體にして、萬有は各々其が一分子、細胞として、相互に依存的、相對的、因果的の關係に於て成立す。此の故に吾人々類も又宇宙と獨立に存するものには非ずして、他の一切の現象との關係に於て、宇宙の一分子として存在するものなり。宇宙は目的にして人類は其方便なり。従つて吾人の凡ての活動は其の向ふ所當に人生の極のみには止まらず、其れを通じて遙かに宇宙の極を指す。此は獨り人類のみに止まらず、宇宙間の凡ての事象は各々其相を異にし、性を異にし、活きを異にすと雖も、孰れも決して其等自身の爲に存するには非らずして皆宇宙てふ一全體中の一部の職を盡し科を盈たし、以て宇宙其物の目的を達する方便としての位置にあり。此は恰も人間てふ一有機體に於て或は肺臟或は心臟或は胃或は腸と特殊の機關ありて各々其の活きを異にすと雖も、究まる所は有機的全體の目的を達するにあるが如し。人類の宇宙に對

する關係又此れに均し。則ち人類は單に人類として全々獨立に存在するには非らずして宇宙でふ一有機體の一部として存在し而して其の一部としての特殊の性を盡し科を盈たすことに於て存在す。」

靈魂不滅論

下 編

第六章 吾人の意識と宇宙精神との關係

斯の如く吾人々類は宇宙其物の一部として存するとせば我等が精神も亦宇宙精神即ち絶對精神の發現して暫らく殊相を表はせるものに外ならず。即ち吾人の意識を宇宙精神の流れに波立つ一浪一浪なり。永却普遍なる意識よりより華咲けるものなり。故に宇宙精神は吾人精神以外のものに非ずして實に其の太源なり本地なり。彼れは大我にして我は小我なり。果して然らば吾等に眞實の死なるものありや。滅びなるものありや。吾等の眼に死と見え滅びと見ゆることも其實は此れ唯狀態の變化形様の推移に過ぎざるに非ずや。永劫普遍なる絶對意識が其の一浪一浪を没して更に他の波瀾を巻き起さんとする準備の段階には

非ずや。波浪は如何に狂ふも如何に碎くるも遂に大海を離れずやがては一如水に融會して平等普遍の性に歸る。個人意識は種々に分れて各々其性を異にすとも、應ては隔ての籬を徹して同じく永劫普遍なる意識の海に融け合ひて又滅するの期なし。斯の如くにして吾人の靈魂は能く永久不滅なるを得るなり。吾等は個人意識の斷絶を恐る。蓋し宇宙の大靈は吾等が靈魂の故郷にして此等は彼の一波一浪に過ぎざることを自覺せざれば也。吾等をして小我に立籠るの迷ひを去つて此の自覺を有せしめよ。而して其の小我を無限に擴大し以て大我と一致せしめよ。融合し抱擁せしめよ。而して安らかに永く大靈の懷ろに眠るとを得しめよ。眞個の不滅眞個の永生も斯の如くにして始めて得らるべきなり。

第七章 宇宙精神を認めずとの説

扱て余は余の説をして確實ならしめんが爲めに此れが反對の位置に立つ説を取りて聊か駁論を試みんと欲す。或は難じて曰ふ者あらん。曰く宇宙精神又は絶対意識といふが如きもの果して存在すとせば汝が所謂靈魂不滅論の意義は聞

將系使魂月、如夕すり不

えたり。されど如何せん其等は凡て一片の空想に過ぎず。宇宙は其實全く無靈無魂なる一個の機械に過ぎざるなりと。此れ吾人が往々自然科学者の口より聴くところにして即ち唯物論的機械觀なり。若し此の説是なりとせば余が所謂靈魂不滅論は其根柢より瓦解せざるを得ず。然らば此の如き唯物論的機械觀を果して能く成立するを得べきか。余の見る所に依れば此論は先づ第一に物質を以て宇宙の本となし而して心意現は唯其が運動の結果なりとなし、第二に宇宙は單に機械的に活動するのみにして其間何等心靈的の原理なるもの存せずと主張するもの、如し。此れ果して眞理なるか。以下此れを評せん。

第八章 宇宙の本質は物體にして心意現

象は運動の結果なりとの説

先づ第一に宇宙の本質を物體にして心意現象は唯そが運動の結果に過ぎるか。心意現象が果して物質の運動より結果されたるものとせば物質を以て宇宙の本體となすことは正當なるべし。されど此は非なり。該論の根據たり母たる

自然科学が其の大原則として掲げ居る「エネルギー不滅則は教へて曰く物質は不生不滅のものなれば其形體は如何に變化するも其の原子其分子の總體は決して増減することなしと。されば物質が新性質新形體を生ずるも其は唯其の部分の結合と排列との變化に外ならず。而して物質の聚散離合に依りて變化をなすも其は他の物質状態より影響を受くるに非ずんば能はず。則ち物力の變化は他の物力を生ずる迄にして決して新元質を生ずること無し。今一例を取りて此れを解せんに、人あり、暴人の爲にいたく其頭を打撲せられ痛苦措く能はずとせず。此の場合腦に或る有形的變化起れるや勿論なり。されど此の有形的變化と苦痛其物とは全く別種のものにして彼れを以て此れを説明すること能はず。蓋し有形的變化其因となりて非空間的物質的なる苦痛を生ずとは説くこと能はず。此故に物質相互間の事象を説明するに當つて因果の關係を言ふは可なりと雖も精神と物質との間に因果律を提し來たるは「エネルギー不滅の大原則に背反するものなり。斯く「エネルギー不滅則に抵觸する點に於て物質に依りて心意を説明せんとする企ては已に破れたりといふべし。

又吾人の身體を組織する物質は常に新陳代謝極まり無きにも關はず自我の形式は恆久不變なり。少壯の經驗も老後の經驗も等しく唯一自我によりて統括さる。即ち自我を形成せる物質と暫くにして一變するも自我其物即ち主觀其物は常に同一なり。此れ又物質に依りては精神を解し能はざることを證し居るに非らずや。更に心理學上又は認識論上より此れを見るに吾人が見て以て物質と呼び自然となす所のものは此れ唯吾人が主觀に影せる寫象に過ぎず。外物の知覺といふともそは唯外界刺激によりて與へられたる神經の運動に伴ふて起る心靈上の現象のみ。吾人は直接に外界其物を知覺するには非ず。吾人の知覺する心象は神經中樞に於ける物質的運動とは全く類を異にしたるものそは飽く迄心象其物にして決して心象以外のものには非ず。即ち一切の物界と言ひ客觀界といふ畢竟は吾人の精神を離れては考へ得べきものに非ず。此れを待ちて始めて認識せらるゝものなり。ゾント曰く科學者が徒らに物象を以て認識の主より獨立せるものゝ如く考ふるは非なり。何となれば所謂物象なるものも其實獨立せるものには非ずして認識の主たる吾人の表象として現するものなればなりと。

又グリーンは曰く、凡て事物は關係によりて成立す。而して關係とは吾人の意識が外界を認識するに當つて自ら課する形式にして主観は此の形式に依りてあらゆる事物の變化進動を貫いて常に現在し、事物の變動を超越して以て其の認識を可能ならしむと。此等は孰れも精神は萬物の本源にして物界は寧ろ其の活きの結果なることを言へるものなり。此等の理由に依りて物質を以て實在となし心意を以て唯其の運動の結果現はれたるものとなす説の不合理なることを知るべし。

第九章 宇宙は單に機械にして靈魂なしとの説

次に宇宙を以て無靈無魂の一大機械視するは果して正當なりや否や。餘は今宇宙には普遍的に意識の存在することを證することによりて該説の非なることを告げんとす。

斯の如く宇宙を機械視する科學者と雖も人類動物及社會には精神の存るす

とを承認し居るなるべし。されど動物以外のものに就いては其の存在を否まんとす。此れ果して正當のことなりや。抑も吾人が自己以外に精神の存在を認むるに當つて其の指導となるべき原理は類推の論法なり。吾人が直接に精神の存在を認め得るは單に自己意識の一點のみ。此れを措きては凡て類推の論法に待たざるべからず。吾人は他人の涕泣又は微笑に依て其の悲痛乃至喜悅を察す。然かも其の心狀の果して如何にあるかは直接知覺すること能はざるなり。然らば此の類推の論法は如何なる範圍に迄應用し得るか。吾人は自己より類推して他人にも精神の存在することを認め進んで人類以外の動物にも精神の存在することを認めたりとせば、猶一步を進めて植物にも精神の存在することを認めざるを得ず。何となれば、軌近生物學の教ふるところに依れば、動植の二界は一見甚だ相違せるが如きも其の最下級のもの即ちプロテイスターと名づくるものに至つては其所屬の孰なりやを斷じ難しといふ。即ちそは動植二界の孰れにも屬せずして然かも其の根原となるものなり。果して然らば動物に於て精神の存在を認めたる吾等は類推論法の指導によりて更に斯かるプロテイスターにも精神の存在を認

め進んで植物に迄その存在を認めざるを得ず。何となれば、プロテイスタは動物の原始なると同時に又植物の原始なれば也。見るべし植物亦精神を有すとせざるべからざることを。或は言はんか。植物には神経系統無きが故に精神なしと。されど神経系統無きは下等動物に於ても同じ。神経系統無きが故に精神なしといふは恰も足無なきが故に蛇は歩くこと能はずといふと一般誤謬の論法に陥れるものといふべし。吾人は已に植物にも又動物と均しく精神の存在することを見たり。然らば精神の存在は唯に有機界にのみ限りたることにして無機界には此れ無きか。何ぞ夫れ然らん。抑も有機無機の兩界は互に相交渉するものにして其實質に於ては兩者間毫も差違あるなし。即ち有機體と雖も其の成分は無機體と同一にして唯或る事状の下に無機體を變じて有機體と化するのみ。則ち有機體は常に無機物を攝取して是れを同化し又不用物を絶えず此れを排泄する等其形式は則ち不變なるも其の成分は常に新陳代謝極まりなきなり。斯くて一定の歳時を経る時は有機體の成分は全く一變して又舊時の物質を止めざるに至る。而して此の際精神の所有者となれるものは此れ豈吾人が曾つて無機體と稱せる

ものに非ずや。然らば吾人は此れを以て始めて死物なりしもの有機體に入りて俄かに生物となれりと解すべきか。換言すれば無機物の際には精神無かりしも一度有機體に入るに及んで忽ち精神を生じ來たれりと解すべきか。されど此は前にも言へる如く、エネルギー不滅の大原則に背反するを如何にせんや。吾人此れを軌近の生物學に聽く。曰く、有機生活は決して絶對の無より生ぜしには非ずして其根原は已に早く無機物中に存在するものなりと。果して然らば何ぞ一步を進めて精神生活が等しく絶對的の無より生ぜざることを言はざるや。此の故にネエグリは曰く物質の本來活動なることを認めざるは今の世に奇蹟を信ずるなりと。洵に然り。我等が自然と呼び又宇宙と呼ぶところのものは決して彼等唯物論者自然論者等の漫りに空想するが如く無靈無魂なる一大死塊には非らざるなり。

以上余は宇宙を以て機械視し死物視し以て其の有心的存在なることを否まんとする科學者的俗論を否認したるが次に余は余が靈魂不滅論の根據を一層確實ならしめん爲めに更に唯我論なるものは就きて少しく言ふところあらんとす。

第十章 唯我論

唯我論は主張すらく、天地間眞に在る在る者は唯我のみ。而して吾人が宇宙と呼び天地と呼び自然と呼ぶ一切の外界は此れ我心の所造のみ。我心を離れて別に外界なるもの存するに非ずと。果して此の論眞なりとせば個我以外に宇宙全體を貫く普遍的大我の存在を主張する余の世界は瓦壊せざるを得ず。されど唯我論は果して正當なるか。

此の論は凡ての知識を以て純主觀的のものとなせば外界は我と共に生起し我と共に消滅すること猶影の形に随ふが如くならん。一切の現象は此れ唯主觀の造れるもの我の盡き出だせるもの外より何等の限定をも受けずして勝手に思浮べたるものなり。されば一切世界の事物は唯此れ一種の夢幻にして吾人は其間に生息して夢に苦しみ夢に樂しみ夢に泣き夢に笑ひ夢に戦ひ夢に争ふ。道德も政治も學問も事業も孰れは同じ一片の夢幻に他ならず。あはれ意味無き人生かな。吾等は果して斯かる教に能く満足するを得べしや。殊に我の外に物なしとせば我親も我子も我兄弟も我友も凡て此れ又一の幻影に過ぎざることゝなる。

第十一章 絶對的唯心論

若し又我は衆多あるものとせば甲の我れ乙の我れ丙の我れ各々其世界を異にするべく一様のところ無かるべきに然かも事實に於ては各自同一の天地を想ひ浮べ同一の山澤河海を想念して誤まらざるは何ぞや。若しそは各我が皆同一の主觀的形式を有するが故なりとせば斯く互に同一形式を有する所以并びに同一形式の一樣に應用せらるゝ所以は何ぞや。又互に相異なれる自我の間に整然たる交渉作用の存する如きは何ぞや。各自我の間何等か一定の關係の存するに非ずば斯の如くあるべき理なし。而して此等の疑問は唯我論の到底答ふる能はざるところにして而してたゞ絶對的唯心論のみ。

能く答へ得る所なり。則絶對的唯心論に従ひば各我は同一の主觀的形式を有すると同時に亦外界其物も同様の形式を有し我れの形式と彼れの形式とは同一不二なるが故に我は能く其の對境を理解して誤まるなく彼の對境は又能く我れに其眞實を傳ひて誤まることなしとなし、而して斯く我と人又は我と外界とがよ

く相一致し契合するは此等が孰れも同一實體より發規し來たれるものしにてそ
 は即ち宇宙精神又は絶対我なりと爲すなり。即ち此れに於ては一切萬有の窮極
 的統一者としての普遍意識絶対的大靈の存在を認むるなり。此れ尤もよく吾人
 が哲學的要求を充たすものにして否まんとして否み難き必然的斷定なり。若し
 吾人にして天地の至妙なる調和整然たる秩序の本源として斯かる窮極的統一者
 を認むるに非ずば吾人は益々天地の不可思議に迷ひ又其の無意義なるに驚かざ
 るを得ざるなり。而して余は求めて斯からんことの愚なるを知るが故に敢て絶
 對的唯心論の大盤石の上に安立せんとす。

第十一章 結論

右の所論に依りて余は宇宙の實在として又其の支配者として普遍的精神絶対
 的靈魂の存在を認むることの決して不稽の空想に非ずして實に吾人の哲學的要
 求より出で來たる必然の斷定なることを不完全ながら證し得たりしと信ず。茲
 に於てか余の靈魂不滅論は又充分の根據あるものなるを知るべし。嘗に理論上

根據あるのみならず古來解脫得道せる哲人の實驗は又よく此れが眞理を語る。
 佛陀が自家内心に潜める眞如佛性を見得することに依りて、禪問の諸大徳が觀心
 自證の工夫を積みやがて本地の風光に接することに依りて、プローティノスが天
 地の大原に没入することによりて、スピ又スピノーザが實在の懷ろに眠ることに
 依りて各々或は解脫を得或は永生を説ける所以のもの其の説き方を異にし方法
 を異にすとは言ひ要するに大我と小我との抱擁觸着の事實を語るものに外なら
 ず。孔子が天生徳於予、桓魋其如予何。と言ひ天之未喪斯文也、匡人其如予何。な
 ど言ひてしばしば天を言ひ、而して其中に安心の脚を立てたるの觀あるは個中自
 ら宇宙の大靈に融けながら解着し居たるの消息を洩すものに非ずして何ぞや。
 基督教に於て新人なるもの、生活の説く。そは神に没し神に抱かれて、神の中に
 生き神の中に活くの状態なり。而して此の神の性質はよし如何なる者として感
 じ居らるゝにもせよ、哲學上所謂大我又絶對意識などいふものとは大に其相異
 るにもせよ、兎に角歸する處は宇宙の大靈其者に外ならざるべく、而して其中に於
 ける生活とは畢竟其の大靈と自己と相抱き相融會せる状態に非ずや。古來永生

を説き不朽を説く者皆何等かの形に於て自己と普遍意識との關係を認め其自覺を言へるものにあらざるはなし。所詮真個の靈魂不滅真個の永生は唯天地の大原たる普遍意識に融合することによりてのみ得らるべきものと知るべし。(完)

靈魂不滅論終

(精神研究會發賣書目)

古屋鐵石著

獨習自己催眠

價郵稅共 四拾四錢

目次

- 「一」自己催眠とは何ぞや
- 「二」自己催眠法の原理
- 「三」自己催眠の準備
- 「四」自己催眠を行ふ法
- 「五」自己催眠を解く法
- 「六」自己催眠の効果
- 「七」自己催眠にて病癩を治する理由
- 「八」自己催眠によりて病癩を治する方法
- 「イ」總論
- 「ロ」神經衰弱治療法
- 「ハ」神經痛治療法
- 「ニ」腦病治療法
- 「ホ」不眠症治療法
- 「ヘ」吃音矯正法
- 「ト」膝小便秘矯正法
- 「チ」船車暈矯正法
- 「リ」眼病治療法
- 「ヌ」胃病治療法
- 「ル」泌尿生殖器治療法
- 「ハ」自己催眠によりて不思議の現象を起す法
- 「イ」肉體は一室に居り乍ら精神のみ轉地療養をなす法
- 「ロ」口寄せ及び乗氣の法
- 「ハ」居ながら遠方の狀況を知る法
- 「ニ」神佛を現はす法
- 「ホ」幽霊又は怪物を現はす法

心身の健康法として自己催眠は唯一の良法也

古屋鐵石著

坐禪獨習法

價郵稅共 四拾四錢

目次

- 「一」禪學とは何ぞや
- 「二」坐禪とは何ぞや
- 「三」坐禪を行ふ準備
- 「四」坐禪を行ふ方法
- 「五」坐禪を解く法
- 「六」坐禪の効果

古屋鐵石著

催眠宗教論

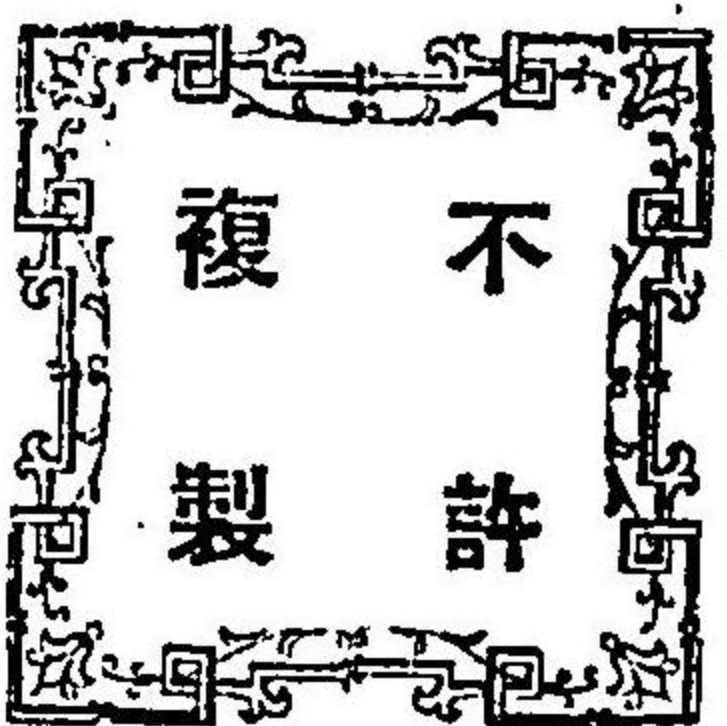
價郵稅共 四拾四錢

目次

- 「上」催眠論
- 「一」緒言
- 「二」催眠術とは何ぞや
- 「三」宗教上より見たる催眠の原理
- 「四」宗教上の奇蹟と催眠術の現象
- 「五」神佛の靈驗と催眠術療法
- 「六」催眠術と宗教との交叉點
- 「下」宗教論
- 「七」宗教とは何ぞや
- 「一」宗教の定義
- 「二」宗教の心理的起源
- 「三」宗教の歴史的起源
- 「四」宗教の種類
- 「一」宗教の發達
- 「二」宗教と迷信
- 「三」宗教と學術
- 「四」宗教と哲學
- 「五」宗教と科學
- 「六」宗教と倫理
- 「七」宗教と教育
- 「八」成立宗教
- 「一」佛敎
- 「二」基督教
- 「三」基督教
- 「四」佛、基二敎の異同
- 「五」理想の宗教以上

明治四十三年八月十日印刷
明治四十三年八月廿五日發行

定價 金十五錢



發行所

東京市芝區愛宕町一丁目二番地

精神研究會

電話芝一、九三四番
振替口座東京三三五一

大賣所

東京日本橋區本銀町
東京神田區表神保町
大阪市東區北渡邊町
東京本郷區本富士町

太東洋堂
東京堂
杉本堂
文光堂

東京神田區表神保町
東京京橋區南渡邊町
東京京橋區尾張町
東京神田區小川町

上田屋
三松堂
東海堂
勉強堂

東京市芝區愛宕町一丁目二番地
著作人 古屋景晴

東京市京橋區南小田原町二丁目九番地
印刷人 中野英太郎

東京市芝區愛宕町三丁目二番地
印刷所 東洋印刷株式會社

精神研究會々則

◎精神研究會々則

(明治三十六年七月創立)
(明治四十三年六月改正)

- 第一條 本會は精神研究會と稱し精神學殊に催眠術の學理應用を研究し其普及發達を圖るを以て目的とす
- 第二條 前條の目的を達せんが爲め本會内に教授部治療部出版部の三部を設置す
- 第三條 教授部に於ては精神學殊に催眠術并に之に關係の諸學科を教授す
- 第四條 教授は通信教授通學教授及び高等專攻科の三種とす
- 第五條 高等專攻科の規定は別に之を定む
- 第六條 通信教授及び通學教授は共に修學期間を三週間とし通信教授を受くる者を通信會員と云ふ
- 第七條 通信會員とならんと欲する者は住所職業姓名を楷書にて認め束脩金五拾錢教授料金壹圓貳拾錢を添へ申込むべし然れば「催眠術教科書」を配布す
- 第八條 通學會員とならんと欲する者は本會所定の入會申込書に記名調印し束脩金貳圓授業料金を

- 八圓を前納すべし然れば精神學應用催眠精神療法を行ひ得るまで責任を帯びて實地教授す
- 第九條 本會にて束修及び教授料を領收したるときは會員證に受取證を添へて發す
- 但通信會員の教授料に對しては教科書の送附を以て受取し證とす
- 第十條 通學會員には在學中に限り本會備付けの書籍を無料にて貸與す
- 但本會外に書籍を持出す場合は定價に相當する丈保證金を要す
- 第十一條 通信會員と通學會員とを問はず本會を卒業したる者は會友として永く優待す
- 第十二條 會員及び會友は本會に對して精神學上の件に就き質問をなすことを得
- 第十三條 會員及び會友は會費を一ケ年に就き金壹圓を納むる義務あるものとす
- 前項の義務を盡せる會員或は會友には「精神治療新報」を毎號配布す「精神治療新報」は年四回(春號、夏號、秋號、冬號)發行す
- 第十四條 會費を二ケ年以上引續き納めたる者には前項第二項により「精神治療新報」を配布する外に年に一回宛「會員實驗報告集」を配布す

第十五條 一時に會費を拾五圓以上納むる者は終身會費を納むるを要せず

第十六條 毎月一回第二日曜日の夜本會に於て「精神學應用催眠術實驗會」を開く

第十七條 會員及び會友は「精神學應用催眠術實驗會」に出席して之を見聞し又自ら實驗をなし或は意見を述べることを得

第十八條 會員の都合により退會するも既納の金は返戻せず

第十九條 但し相當の書籍を進呈することあるべし 本會治療部に於ては學術應用の研究として催眠精神療法を行ふ

第二十條 催眠精神療法を受んと欲する者は本會所定の「治療券」を豫め購入し指定通りに記入して差出すべし

第二十一條 第一期とし金五圓五拾錢市内出張施術は六回を第二期とし金拾圓以上場所に依り協定するも第一期とし金拾圓以上場所に依り協定する

但催眠精神療法に不適當の病人と認めたるときは施術を謝絶す

第二十二條 本會出版部博士書院に於ては精神學研究者の便宜を圖りて精神學關係の書籍を發行

第二十二條 會員或は會友會則に背き又は精神學者たる品位を傷くる行爲ありと認めたるときは之を除名す

◎卒業試験規定

第一條 會員本會所定の學術を履修し催眠精神療法を行ひ得るに至るも受験すると否とは會員の隨意とす

第二條 通信會員の卒業試験は論文試験のみなるも通學會員の卒業試験は論文試験の外に口述試験及び實地試験を行ふ

第三條 通信會員にて卒業試験を受けんと欲する者は何時にても左記の卒業試験問題中隨意に一問題を選み答案を認め提出すべし

一受験者が催眠精神療法を行ひて惡癖或は疾病を治したる實例及び其學理上の説明

但被術者の住所職業姓名年齢及び實驗の場所并に其年月日を明記すべし

一受験者が動物を催眠せしめたる實例及び其學說

但實驗には立合人を附し其住所氏名及び實

驗の場所年月日を明記すべし

一在來の學說に異なる精神學應用不思議の實驗例及び其理論

但實驗には立合人を附し其住所氏名及び實驗の場所年月日を明記すべし

第四條 通學會員にて卒業試験を受けんと欲する者は講習を終りたるるとき直に卒業論文(問題は隨意)を認め提出すべし

第五條 通學會員の口述試験及び實地試験は論文を提出したる者には之を行ふ日時を通知す

第六條 答案の用紙は十二行野紙を用ひ書體は楷書に認むべし

第七條 答案は勉めて簡明とし受験者の住所職業姓名を明記すべし

第八條 會費滞りたるものは既納の上にあざれば受験を許さず

第九條 答案は本會内試験掛に宛て(通信會員は受験料金壹圓通學會員は受験料金貳圓を添へ差出すべし)

第十條 答案受附より七日間内に詮考の上及落を決定し必ず其結果を受験者に通知す

第十一條 通信會員及び通學會員にして及第した

るときは各其卒業證書を授與す

第十二條 落第者は更に研究を積みて幾度にも受験することを得何度受験するも受験料は初め一回の外納むるに及ばず

第十三條 此試験規定に違反して卒業證書を得ることを得ず

◎地方委員規定

第一條 本會の教授を受け催眠精神療法を自在に行ひ得る會員中より品位高潔の學者を選抜し地方委員に推薦す

第二條 地方委員の推薦及び解除は「精神治療新報」誌上を以てす

第三條 地方委員の職務は精神學の普及を圖ると及び本會より特に用務を委囑することあるべし

第四條 地方委員は名譽職とす

但本會の爲め要したる費用は總て本會にて支辨す

第五條 地方委員中會務に勉勵し盡力したるの功蹟顯著なる者には賞狀に慰勞金を添へて其功勞を謝す

◎高等専攻科規定

- 第一條 通學學員にして本會を卒業したる者は高等専攻科に研究生として入學することを得
- 第二條 高等専攻科に於ては催眠精神療法に就きて學理と實驗とを比較對照して新發見をせんとするにあり
- 第三條 高等専攻科の修業期間は一ケ年とす
但研究者の都合により本會の承認を経て修業期間を延長し或は短縮することを得
- 第四條 高等専攻科に入學せんと欲する者は履歷書及び入學願書に入會金拾圓を添へて差出すべし
- 右の外本會々則第十三條による會費（一ケ年に就き壹圓）を要するも其他に何等の出費を要せず
- 第五條 高等専攻科の研究生は本會にある書籍器具を承認を経て研究の目的に限り使用することを得
- 第六條 研究生研究の結果を論文に認め提出したるときは審査の上及第しむる者には高等専攻科卒業證書を授與す

御研究の案内

●本會は元大日本催眠術協會と稱し明治三十六年の創立にして爾來年を閱すること八年、日を追ふて隆盛となり基礎鞏固となりたるを以て、更に改良し發展せんがために明治四十三年一月「精神研究会」と改稱せり。

●本會員中「催眠精神療法」を自由に行ひ得る者の中より、品位高深なる士を選抜し囑託したる地方委員の数は、明治四十三年五月五號參照）地方委員の住所芳名は「本會機關雜誌」に明記しあり無責任の虚言にあらざる。地方委員には立派の方多く月收百圓以上の方珍ならず。實に可驚大成功なり、公私の爲め盡せし功蹟は偉大にして幾々たる本會の事業として世に誇る處なり、會員が其所在地の地方委員の住所芳名を知り度ときは、本會にては會員に限りて詳細通知す。

●本會は日本に於ける催眠術通信教授の元祖にして本會の通信教授を受ければ必ず催眠術は、自在に行ふことを得るは論より難敷、本會設立以來茲に數年、通信教授を受けしもの無數なるも、催眠術不成功に終りしことを聽かず、故に何人にとりて本會の通信教授を受ければ必ず成功すること信ず、故に本會の卒業證書を有すれば催眠術治療を行ひ得る實力あることを證明することとなる、從て其筋の許可を得て催眠術教授兼治療所を開くを得べし。

●但し通信教授によりて修めし者と、通學教授によりて修めし者と、實力及び信用の度に於て大に異なる、よりて通學教授の方可能なり。

●本會には歐米出版の催眠術書及び日本の各催眠術會に於ける催眠術通信講義録を初めとして數千冊の催眠術書あり一冊の催眠術書にして定價二圓以上の書少なからず、中には定價拾餘圓の書あり其れを何冊にても通學會員は無料にて借覽するを得之れのみにて東修及び教授料に對する償値は薄山あり。

- 通學教授の修學期間は三週間と定めあるも特別速成に修學せんと欲する者には期間を短縮して一と通り教授す、又高等専攻科を卒業し尙進んで研究せんと欲する者には相談の上本會の事務員に採用し事務を探りつゝ研究する便宜を與ふ。
- 但事務員就職中は相當の月俸を給與す。
- 通信會員に配布する「催眠術教科書」は目下完結し居るを以て、入會せば直ちに全巻一時に配布す、此場合は小包料市内八錢内地拾成錢、臺灣清國は參拾錢を添へられし、然れば書留小包にて一時に運送す、書留小包なれば途中紛失の虞なくして御互に利益なり。
- 「催眠術教科書」は菊大判にして、全巻總頁數四百〇六頁、總字數大凡三十八萬三千六百字なり、日本には目下の處催眠術書としては之れ以上字數のある書なし、比較的此書程安價なる書は他になし、専門學士數名が分擔執筆になれる書は催眠術書としては此書の他になし、同書は實に催眠術者が多年研究の結果になれる、嶄新なる卓説を主として掲載したるものにして、應用實踐を旨とし平易明瞭にして婦女童蒙にも了解し易からしめ、恰も教師の面前に在て其講義と實驗とを見聞する如くならしめ、實地に臨み参りも遺憾なからしめたり。
- 此教科書のみを讀めば必ず催眠術は自在に行はる、參考書は尙進んで研究する場合に限り必要なり。
- 毎月第二日曜日の夜に限り通信會員本會に御出になれば、施術の實況を御覽になることを得、又遠方の會員にして本會に御出に

なること能はざる方には催眠術を自由に施し得る會員、大日本帝國には到る處に散在せるを以て、御申越により本會に於て最寄の會員に紹介し、施術の實況を見聞する便宜を與ふべし、此場合に於て先進の會員は後進の會員を教導するの義務を負はれたし。

●但し以上の紹介を乞ふ會員は、會費を貳ケ年分以前金に納めあることを要す。

●催眠術を竊に研究せんとせらるゝ御方には、其趣き御申越により、郵書の往復にも本會の名を用ひず、本會附屬「博士書院」の名を以てし又其事を醫て他へ洩さず。

●高等小學校卒業以上の學力を有する者は誰でも（神經衰弱者にても）催眠術を甘く施し得る様成功す、獨り男子のみならず女子にても必ず成功す。

●催眠術教科書の掲載科目及び擔任講師は左の如し。

●催眠術獨稽古、動物催眠法、催眠術治療法、催眠術教育法、催眠法理論（一部）、古屋鐵石、西洋獨按摩術、醫學士志賀光雄、自動書記、文學士花澤浮洲、催眠心理學、文學士上野柳眠、催眠法理論（一部）、法學士平賀周。

●目下の教科書には前記の科目を掲載せるも學期の異なるに從て改良進歩を加ふることあるべし。

●會員受験答案の認め方の模範ともなるべき文が「精神治療新報」第七十三號の紙上に小野澤靜護士を受験答案掲げあり、受験せむとする者は参考とせられたし。

●非醫者が催眠術治療所を開業する手續は「精神治療新報」第七十五號に掲げあり。

●本會にて知らぬ催眠法は此世になし、日本の各所に於て各人が行ふ催眠法は勿論海外に行はるゝ法にても、著名の催眠法は悉く本會にては知り居れり、其れを通學會員には認みによりて參考と

治療の御案内

して悉く教授す。
●催眠術を少しく深く研究せんと欲せば其基礎たる精神哲學と
●雙心心理學の一斑に通ずるを要す、催眠術を應用して人の疾病を
●治せんと欲する者は其基礎たる精神學と神經病學とを研究す
●るを要す、よりて本會にては其四科目に重きを置き教授す。
●通學會員への教授科目は別項に明記せり。
●通學會員の通學日数は三週間と定めあるも都合により日曜日毎
●又は土曜日毎に來會し數ヶ月に跨るも差支なし。
●通學會員の入學は定員に滿つれば謝絶す、故に入會希望者は豫
●め御紹介ありし。
●本會へ御出になりて御入會になる場合は係員が萬事取計ひ申す
●べし、會主は御入會の後には實地教授の場合に當りて面談す。
●地方の會員御上京の折の宿所は本會の近傍に旅人宿下宿屋數多
●あり、下等は一日三食附宿泊料三四拾錢、上等は一圓前後なり。
●會員の質問に對する本會の應答は成るべく「機關雜誌」上に於て
●す。
●會費は御入會と同時に一ヶ年分(金一圓)以上一時に御納め被下
●度し。
●通信會員にして會長に面談を要する爲め、御來車の御方は第二
●日曜日の夜に致されし、然れば必ず會長在會し御待ち申す、殊
●に當夜は實驗も有之御研究には至極御便利なり、其他の日突然御
●來會被下も往々留守の事あり、偶々在會するも常に用向多忙の
●爲め、折角の御訪問に對し失禮の事有之やも知れず、故に御來
●車の折は豫め御紹介を乞ふ。
●本會にては基本財産として田畑山林を所有し、衆議員議員選舉
●權も有し居れり、故に決して無責任の行爲は爲せず、御安心
●の上御入會あられたし。

治療の御案内

●此案内書を讀むて了解の點を生じたる方も、會員となり教科
●書及び機關雜誌を見れば悉く了解するなるべし。
●本會は東京に有名な芝愛宕山の裏天徳寺の前にあり、近き電車
●停留場は街鐵なれば「愛宕町の停留場」外濠線なれば「虎の門外停
●留場」より約四五町の處なり。
●本會にて行ふ催眠術療法は何回受くるも苦となること毛程も
●なくして效のみあり。
●此療法は普通の醫術療法と兼れ行ふも效のみありて決して害な
●し。
●施術申込の受附時間は毎日午後二時より三時迄の間とす。(時間
●但月曜日及び大祭日は定期休業す)
●普通施術料は第一期分(即ち三回の施術料)金三圓、第二期分(六
●回の施術料)金五圓五拾錢とす。
●市内出張施術料は第一期分(即ち三回の出張施術料)金十四以上
●の施術料は總て前金の事。
●無資力者たる貧困者に限り何回にても無料にて
●施術す。
●此療法にて最もよく治する病は左の如し。
●●腦病、逆上、耳鳴、頭痛、神經衰弱、神經痛、
●●神經過敏、神經性心悸亢進、神經性呼吸困難、
●●鬱症、不眠症、歇斯、私的里、依卜昆哇里、胃腸
●●病、便秘、癱瘓、痲瘋、脚氣、半身不隨、癩癧、
●●早漏、陰萎、遺精、月經異常、妊娠嘔吐、分娩
●●痛苦、不妊症、記憶減弱、小膽、飲酒癖、喫烟癖、開齒、

書籍御注文者へ御注意

●此御注意を無視して書籍を御注文になる
●(と餘分の手數と誤解とを生じ御互の不利)
●一、書籍御注文書には住所姓名を必ず楷書にて明記すること、即
●ち何府縣何郡何町何番地何之某と明記すること。
●一、御注文の用紙以外何の事も記さざること、書籍御注文書と其他
●の御注文の用紙は別紙に認むること。
●一、御送金の場合は振替貯金にて登記料二錢を添へ本會の振替貯
●金口座東京五番五番宛振込されたし、然れば決して紛失す
●ることなし。
●一、古き書籍目録を見て注文する品切のことあり、よりて目録
●は新らしきものを見て注文ありし。
●一、郵便爲替にて御注文の場合は受取人を「精神研究會」とし拂渡

書籍御注文者へ御注意

●此御注意を無視して書籍を御注文になる
●(と餘分の手數と誤解とを生じ御互の不利)
●一、書籍御注文書には住所姓名を必ず楷書にて明記すること、即
●ち何府縣何郡何町何番地何之某と明記すること。
●一、御注文の用紙以外何の事も記さざること、書籍御注文書と其他
●の御注文の用紙は別紙に認むること。
●一、御送金の場合は振替貯金にて登記料二錢を添へ本會の振替貯
●金口座東京五番五番宛振込されたし、然れば決して紛失す
●ることなし。
●一、古き書籍目録を見て注文する品切のことあり、よりて目録
●は新らしきものを見て注文ありし。
●一、郵便爲替にて御注文の場合は受取人を「精神研究會」とし拂渡

東京市芝區愛宕町壹丁目貳番地

精神研究會

責任者 古屋景晴(雅號)

電話芝一九三四番
振替口座東京二三五五番

正二位伯爵東久世通禧閣下書 文學士北村忍堂先生閱
國文學博士高波武右衛門先生序 古屋鐵石編著

應學 用理 家庭 禁厭 術

定價郵稅共
金四拾四錢

目次

一	禁厭術の意義
二	禁厭術の歴史
三	禁厭術の原理
四	禁厭術の分類
五	禁厭術の修業
六	禁厭術の修業
七	禁厭術の修業
八	禁厭術の修業
九	禁厭術の修業
十	禁厭術の修業
十一	禁厭術の修業
十二	禁厭術の修業
十三	禁厭術の修業
十四	禁厭術の修業
十五	禁厭術の修業
十六	禁厭術の修業
十七	禁厭術の修業
十八	禁厭術の修業
十九	禁厭術の修業
二十	禁厭術の修業
二十一	禁厭術の修業
二十二	禁厭術の修業
二十三	禁厭術の修業
二十四	禁厭術の修業
二十五	禁厭術の修業
二十六	禁厭術の修業
二十七	禁厭術の修業
二十八	禁厭術の修業
二十九	禁厭術の修業
三十	禁厭術の修業
三十一	禁厭術の修業
三十二	禁厭術の修業
三十三	禁厭術の修業
三十四	禁厭術の修業
三十五	禁厭術の修業
三十六	禁厭術の修業
三十七	禁厭術の修業
三十八	禁厭術の修業
三十九	禁厭術の修業
四十	禁厭術の修業
四十一	禁厭術の修業
四十二	禁厭術の修業
四十三	禁厭術の修業
四十四	禁厭術の修業
四十五	禁厭術の修業
四十六	禁厭術の修業
四十七	禁厭術の修業
四十八	禁厭術の修業
四十九	禁厭術の修業
五十	禁厭術の修業

▲効力の有無を實驗あれ▼

迷信に非ず心理哲學の應用也

一	禁厭術の意義
二	禁厭術の歴史
三	禁厭術の原理
四	禁厭術の分類
五	禁厭術の修業
六	禁厭術の修業
七	禁厭術の修業
八	禁厭術の修業
九	禁厭術の修業
十	禁厭術の修業
十一	禁厭術の修業
十二	禁厭術の修業
十三	禁厭術の修業
十四	禁厭術の修業
十五	禁厭術の修業
十六	禁厭術の修業
十七	禁厭術の修業
十八	禁厭術の修業
十九	禁厭術の修業
二十	禁厭術の修業
二十一	禁厭術の修業
二十二	禁厭術の修業
二十三	禁厭術の修業
二十四	禁厭術の修業
二十五	禁厭術の修業
二十六	禁厭術の修業
二十七	禁厭術の修業
二十八	禁厭術の修業
二十九	禁厭術の修業
三十	禁厭術の修業
三十一	禁厭術の修業
三十二	禁厭術の修業
三十三	禁厭術の修業
三十四	禁厭術の修業
三十五	禁厭術の修業
三十六	禁厭術の修業
三十七	禁厭術の修業
三十八	禁厭術の修業
三十九	禁厭術の修業
四十	禁厭術の修業
四十一	禁厭術の修業
四十二	禁厭術の修業
四十三	禁厭術の修業
四十四	禁厭術の修業
四十五	禁厭術の修業
四十六	禁厭術の修業
四十七	禁厭術の修業
四十八	禁厭術の修業
四十九	禁厭術の修業
五十	禁厭術の修業

(特別大割引改正定價表)

Table listing various books and their prices. Columns include author/publisher, title, and price. Includes titles like '催眠術の奧義', '催眠術の進歩', '催眠術の療法'.

通學會員への教科目

Table of subjects for members. Columns are numbered 1-13 and list subjects like '精神學', '催眠術', '眼病學', '生理學'.

精神研究會發賣書目
尚隨意科目として宗敎學教育學及以精神學研究に關係せる諸學科を敎授す。
明治四十三年四月

精神研究會教授部

博士學士大家論集 (寫真版木版摺挿入) (菊大版書百拾貳頁)

不思議の研究

定價郵稅共 金四拾四錢

○不思議の現象	醫學博士 橫山又次郎	○精神と疾病との關係	醫學博士 山極勝三郎
○夢中遊行に就て	醫學博士 橋本三郎	○被殺された時の心地	神學博士 バスツール
○孤立せる精神能力	文學博士 福來友吉	○心靈的現象研究	文學博士 姉崎正治
○意の儘に人間を造る法	文學博士 外山龜太郎	○身體鍛錬術	醫學博士 高木兼寛
○心靈的現象	外國語學校教授 平井金三	○幽霊生活の狀態	醫學博士 テ、アル
○不可思議	醫學博士 福來友吉	○幽霊は確に在る	醫學博士 坪井正五郎
○精神病は傳染す	醫學博士 吳秀三	○潜在意識に就て	醫學博士 川合貞一
○生兒の男女を豫り判定する法	醫學博士 木村徳衛	○假死と睡眠	醫學博士 松岡道治
○病は氣からと云ふ言葉の實證	醫學博士 井上四郎	○人生二百年	醫學博士 松木謙三
○幽霊談	醫學博士 赤羽武次郎	○精神的養生法と肉體的養生法	醫學博士 吉永長延
○夢中遊行症談	醫學博士 石川千代松	○陶宮術(運命轉換法)	醫學博士 佐藤華光
○妖怪	醫學博士 田村化三郎	○西洋夢列斷	文學士 佐伯政之助
○物質を支配する精神の力	醫學博士 横山又次郎	○意識の統一	文學士 補永茂助
○遺傳の最新研究	醫學博士 芝田徹心	○神道の奇蹟と神遊	文學士 足立栗園
○腦病神經病精神病異同の辨	醫學博士 宮土川	○精神的治療法	醫學博士 高瀬武次郎
○觀心術	醫學博士 三宅新	○鬼神論	醫學博士 片山國嘉
○愚癡の改良	醫學博士 今村吉秀	○酒客治療所	醫學博士 元真勇次郎
○色情教育	醫學博士 新井山	○人格修養	醫學博士 高山憲定
○美人の資格	醫學博士 渡戸稻造	○睡眠の必要	醫學博士 兒玉修治
○文明と神經衰弱	醫學博士 新造吉	○誰にも出来る人相鑑定	醫學博士 長與稱吉
○冷水療法			
○音が身の缺點を矯正したる予の實驗			

古屋鐵石著 (最新刊)

男女運命豫知術

一名ブランセット術

菊大版壹百頁寫真版木版挿入 價郵共四拾四錢

ブランセットとは何ぞや○フレンチとは何ぞや○ブランセットの沿革○日本に於けるフレンチの元祖○ブランセットに類せる術▲人格變換術○人格と性格との別○人格變換の根本的事實○數個に分裂したる人格○催眠術による人格變換の實例▲狐狗術○コックリの構造○使用法と原理○井上博士の實驗と學說▲機轉術(テイナルトルニンク) ▲機轉術を行ふ方法○ゴットフレイ氏元真博士の實驗談○理論 ▲自動書記術(オートマチック、ライティング) ○自動書記の現象○福來博士の說○カーネ氏の實驗○著者の實驗○自動書記による天賦通的實驗○理論○高島平三郎氏の說▲水晶凝視術(クリスタルゲイジング) ○水晶凝視とは何ぞや○水晶凝視を行ふ方法及び其效果○原理 ▲心讀術(サイコメトリー) ○心讀の現象○其方法○平井金三氏の說○理論 ▲鬼神術(スピリチュアリズム) ○鬼神術の現象○幻妙不思議○井上元真博士の說○ブランセットの使用法○金と女とに對する運命とブランセット ○米國に行はるる使用法○使用上注意すべき點○金儲の成否を占ふ法 ○米相場の高低を前知する法 ○配偶者の選定方を占ふ法 ○如何なる配偶者に縁あるかを占ふ法 ○病氣の治法を占ふ法 ○如何にせば目的を達するかの占ふ法 ○魔氣の豐凶を前知する法 ○金と女との不足を醫する法 ○女の心を知る法 ○吉凶の前知を占ふ法 ○愛春○ブの過信を避くべき事 ○ブランセット實驗例 ○外國大家と我國人との實例 ○平井金三氏と朝比奈米作氏との實驗 ○ブランセットの活動する原理 ○出づる博士の說 ○潛在的精神とは何ぞや ○精神分裂とは何ぞや ○信用厚き學者の說 ○參考書名

(精神研究會發賣書目)

古屋鐵石著 (最新刊)

驚天 反抗者催眠論

動地

菊大版壹百頁寫真版木版挿入 價郵共四拾四錢

精神○反抗せる鳥獸を催眠せし實驗 ○反抗せる人間を催眠せし實驗 ○反抗者を催眠せし實驗 ○暴行せる狂人を催眠せし實驗 ○反抗者に手を觸れずして催眠せしめし實驗 ○心と心と談話せし實驗 ○催眠術を施さるゝことを知らずして遠く離れ居る者を催眠せし實驗 ○不承諾者を催眠せし實驗 ○術者と患者と遠く離れ居りて催眠治療を行ひし實驗 ○諸博士立會の上道方に居る者を催眠せし實驗 ○被術者反對に術者を催眠せし實驗 ○麻酔薬を用ひて行ふ催眠法 ○大家の常に行ふ催眠法 ○メスマルの催眠法 ○プレートの催眠法 ○ベルンハイムの催眠法 ○リエボアの催眠法 ○シヤコーの催眠法 ○イヌテールの催眠法 ○フアノの催眠法 ○ボニーヌの催眠法 ○ウエツターストランドの催眠法 ○ザンイーテン及びビザアンンターグエムの催眠法 ○リッチエトの催眠法 ○ルイスの催眠法 ○グアイレンの催眠法 ○アラムウエルの催眠法 ○ベルケルの催眠法 ○ラセムの催眠法 ○レンターシムの催眠法 ○フロアリーの催眠法 ○グスマムの催眠法 ○リシグアの催眠法 ○ハンセンの催眠法 ○熊代先生の催眠法 ○福來博士の催眠法 ○結論

824
207

(精神研究會發賣品)

催眠精神療法家必携

▲催眠精神療法家必携

催眠凝視球

(定價送料共 金六拾錢)

抑々醫師が患者に接するに聴診器の必要あるが如く、催眠術治療家は被術者に接するに催眠凝視球を必ず持たざるべからず然るに完全なる催眠凝視球なきは催眠術治療の結果はんと欲するもの、常に遺憾に堪へざる所なり。本會爰に感あり、積年苦心したる此球を製出するに感受し、此球の特色を一二擧ぐれば左の如し。

一 在に深進 此球は殊に催眠術専用の具にして、美麗莊嚴なるを以て患者が醫師の聴信を診器に對する観念の如く被術者が施術者の持てる催眠凝視球に接すれば**信仰**心を高著しきこと。

一 球は金屬製なるを以て壞はる子孫に傳ふるを得 一 球は金屬製なるを以て壞はる子孫に傳ふるを得

一 何人も使用し得るやう使用法説明書 以上は如き特點あり、よりて之れを希望者に分譲し初めてより幾何ならざるに此球に夥だして初めて催眠術は自在となれり、重患惡癖をして全治せしむるを得たりとの報告

催眠凝視球

(再版出來)

▲催眠精神療法家必携

催眠精神療法家必携

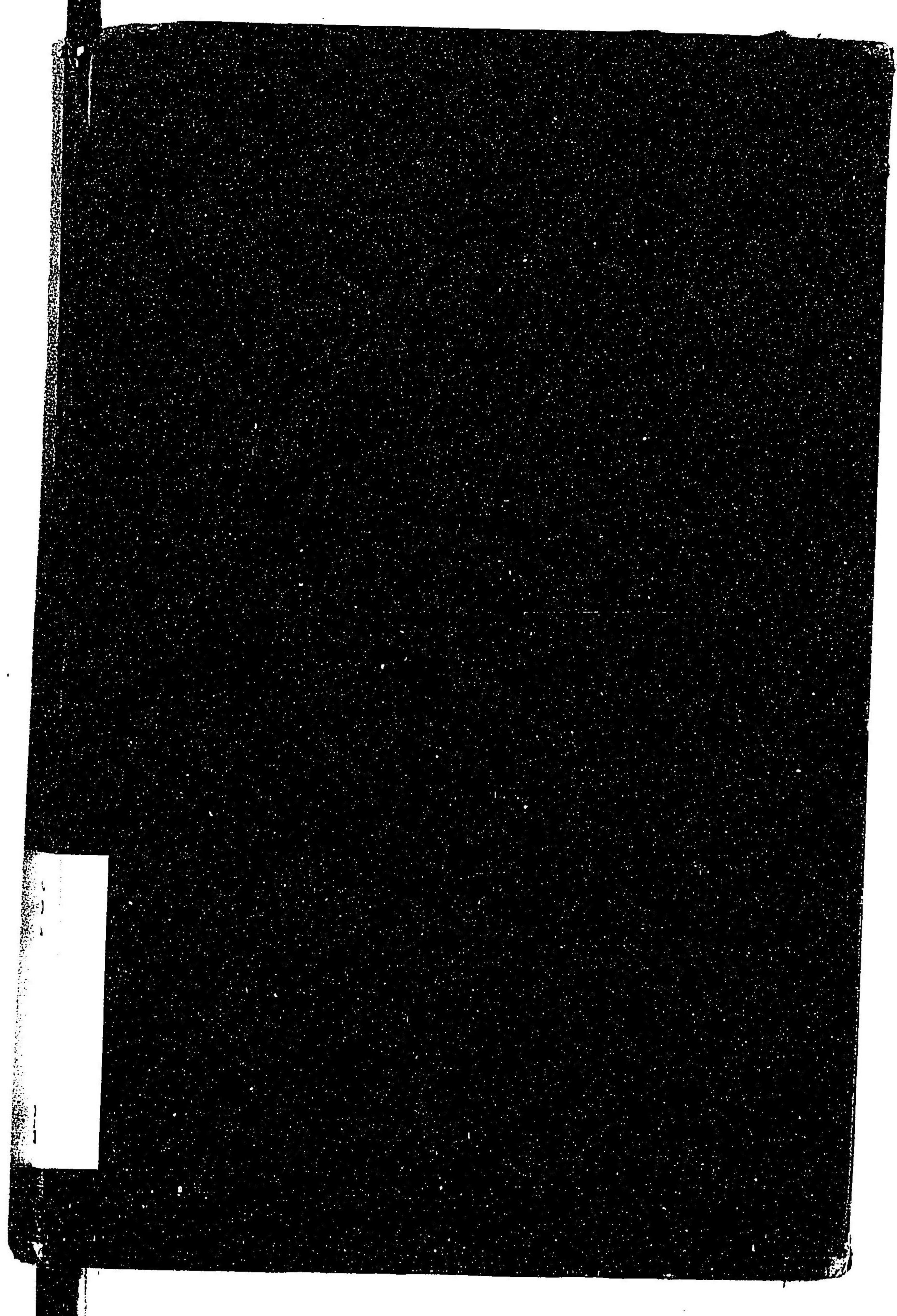


京東本日

區 芝

會究研神精

1324
207



324
120

013785-000-4

324-207

靈魂不滅論

松本 天籟 / 著

M43

ABA-0275



